

『底が突き抜けた』時代の歩き方 309

アカルサハ、ホロビノ姿デアラウカ - 映画『暗い日曜日』

太宰治は『右大臣實朝』の冒頭部に、アカルサハ、ホロビノ姿デアラウカ。人モ家モ、暗イウチハマダ滅亡セヌ。と書き刻んでいる。その少し前に實朝は「平家八、アカルイ」と呟いており、太宰はこの小説を書き始めた昭和17年10月末から翌18年3月に書き終えた頃の日本の「アカルサ」を平家の命運になぞらえて、こう呟かせていたと思われる。映画『暗い日曜日』を観ながら、私は太宰治の呟いている姿を思い出していた。あーあ、今の二ホンも大変だと思われるのに、アカルイ、アカルスギルと痛感もしていた。アカルサハ、ホロビノ姿デアラウカ。

映画『暗い日曜日』は題名通り、確かに暗い。ナチが登場する時代だからだ。しかし、主人公のヒロインの振舞いは、明るい。暗さが忍び寄ってくる時代を意識しているからこそ、彼女はできるだけ気丈に明るく振舞おうと努めている。暗い時代が到来しているのに、そのことに気づこうとしない鈍感さとは無縁だから、彼女の明るさには「ホロビノ姿」は一向にみえてこない。むしろ、そこには「ホロビ」を超えていこうとする力強い意志がみられる。だが、時代も他の男の主人公たちの行く末も限りなく暗い。暗さを真正面から受けとめて押し潰されていくのだ。それでもヒロインをめぐる三角関係は悩ましく、明るい。関係が崩れようとするギリギリのところで、3人の賢明な選択の意志によって絶妙なバランスが図られるが、ナチの登場によってそのバランスもあっけなく突き崩されてしまうのだ。

1930年代末、ハンガリーのブタペストに一軒のレストランがオープンし、オーナーのラズロと彼の若く美しい恋人のイロナによって運営されていく。店を繁盛させるために、名も無いピアノ弾きのアンドラーシュを雇い入れる。客の入りもよくなり、常連客にはイロナの大輪の咲いたようなあでやかな美しさに魅せられる者も多く、ドイツからやって来る情熱的だがやや強引な若者ハンスもその一人だった。

イロナの誕生日にラズロはブルーのアメジストの髪飾りを贈り、イロナとラズロの恋人同士の関係を身近で耐えている微妙な表情を浮かべる、少し陰りを含んだロマンチストのアンドラーシュはプレゼントとして、控えめに自作の曲「暗い日曜日」を捧げる。彼の心境が滲みでたような暗鬱で日常のバランスを失いかねない危うさと、一度耳にするとこびりついて離れない、はかない旋律の美しさを奏でるその曲は、その店に居合わせた者全員の手を一瞬止め、耳をそばだたせる不思議な魅力をもつ場所にまで満ちていた。初めて聞くその曲に全員が魅せられたのだ。とりわけ曲をプレゼントされたイロナはその曲に心を打たれ、恋に陥る。熱病で放心しているようなイロナの表情を傍らで見て取ったラズロは、そのことに気づく。

そんな雰囲気の中、イロナに憧れているハンスは祖国ドイツに帰ってドイツの貿易

商社を自分の手でつくりあげてみせるとイロナに語り、愛を告白してドイツと一緒に来てほしいと結婚を唐突に迫る。しかし雷にでも打たれたかのようなハンスの性急な求愛は、先程目の前で弾かれた曲の余韻に包み込まれているイロナには当然届かない。ハンスの無謀なまでの挑戦は、彼女の頑なな拒絶によって儚い夢と化する。閉店になり、いつものように3人は別れ、アンドラーシュは自分のアパートに向かい、ラズロとイロナは別の方向へと足を向けるが、いつもと違うイロナの様子にラズロはアンドラーシュの後を追って行かないのか、というと、イロナは堰を切ったようにアンドラーシュの後を追って駆け出す。なんともいえない思いでとりとめもなく歩いているラズロは、当てもなくさ迷っているハンスと途中で一緒になり、振られた者同士は慰め合って別れるが、しばらくして川で大きな音がしたのでラズロが駆けつけると、ハンスが橋から身を投げて自殺したことを知る。

イロナとアンドラーシュがベッドで甘美に抱擁し合っていた頃、自分も川に飛び込んでハンスを救出したラズロは、ずぶ濡れの彼を自宅に連れ込んでソファに寝かしつけていた。映画にとってイロナの誕生日を祝うシーンに始まって、イロナを取り巻くラズロ、アンドラーシュ、ハンスのその夜のそれぞれの行動は、非常に象徴的で重要な意味をもっていると感じられる。ナチがいよいよ登場してくる映画の後半は、その場面が拡大された展開を辿っているからだ。新たな恋人同士となったイロナとアンドラーシュ、ラズロに命を助けられたハンスのラズロへの感謝と友情、それぞれの関係がどのように変転していくかが、この映画の第二章のテーマである。

三角関係がどのような悲惨な結末を辿るかは、新聞の三面記事を拾いだすまでもない。一对の男女関係のなかに別の男か女が絡んでくるようになったとき、元の男女関係は必ず壊れて新たなカップルが生みだされるが、そのプロセスがけっして平穏なものではなく、大抵の場合、心身共に流血を招く事態に陥るのは避けがたい。なぜそうなるかははっきりしている。対としての関係を外された者がその関係を失ったことに耐えられず、関係の喪失を関係のなかの自分の喪失の耐えがたさとして、目の前で新しく生まれている関係への攻撃性としてどうしても発揮してしまうからだ。人間の破滅願望がそういうかたちで露出されてくるのである。

この映画の見所はもちろん、そんなありきたりな三角関係に終わらせていないところにある。三角関係が成り立たないのは、一对の男女関係は閉ざされているためにその男女が新たにつくりだす他の男女関係をけっして許容せず、排除しようとするからであり、現に男女関係のほとんどがそのような心理的規制をどうしても働かせてしまう。しかし、元からある一对の男女関係の上に新たな男女関係が加わったとみなされて、そのような男女関係の拡がりのなかで各々が行動することができるようになれば、三角関係は新たなフィールドの中で生き延びられるかもしれない。

アンドラーシュと一夜を過ごしたイロナは、これまでのラズロと自分の関係を問い糾す。このシーンも不思議なシーンである。通常であれば、ラズロに疚しさを感じて済まなく思うなら、二人の関係にあえて触れないように努めるのはイロナのほうであって、ラズロこそが嫉妬混じりの感情を剥きだしてイロナを責めてもいいだろうからだ。だがそ

のようなラズロであったなら、前夜にアンドラーシュの後を追って行くことを勧めるような言葉をイロナに投げかける筈がない。イロナはそんなラズロを愛していたし、ラズロのほうも好きになったら一目散で突っ走る情熱的なイロナを愛していたのである。お互いの気性を知り尽くしている二人は、そんなありのままのお互いを愛し合っていたのだ。

ラズロの返答しだいでは彼との別れも漂わせているイロナの気迫に押されて、ラズロは全部を失うよりもちょっとだけ失うほうがましだと答えて、イロナとアンドラーシュの関係を認める。ラズロもアンドラーシュも共に愛しているイロナは、ラズロともこれまでと同じ関係が続けられることになって安堵する。三人の関係に一番違和感を抱いていたのはアンドラーシュであったが、三角関係を気に入りに楽しんでいるようにみえるイロナを独占するだけの強引さもない。イロナに引きずられて二人の男も快活さを装っているようにはみえるけれども、イロナがアンドラーシュと過ごしているときにはラズロが、イロナがラズロと過ごしているときにはアンドラーシュが、それぞれ複雑な表情を浮かべて胸を掻きむしっていたのである。それでも危ういバランスを奏でながら三人の関係は順調に進んでいた。

アンドラーシュがイロナのために作曲した「暗い日曜日」は店で評判を呼び、訪れた客の中にレコード会社の幹部がいたこともあって、ラズロの力添えでレコード化され、世界中で大ヒットする。ところが、その大ヒットの裏で、「暗い日曜日」のレコードを掛けたまま自殺するという事件が相次いで起こったために、とうとう「自殺の聖歌」という烙印を押されてしまう。歌詞もつけず、自分がどのようなメッセージをこめたのかもわからないのに、自分の作った曲が人を自殺に追いやってしまうことにアンドラーシュは苦悩し始める。落ち込むアンドラーシュを支え、奮い立たせるのはイロナであり、ラズロであった。今や三人にとって、お互いがなくてはならない関係に育ちつつあった。そんな関係がいつまで続くのかを試みるように、ドイツではナチが猛威を振るい始め、重苦しい戦争の暗雲がブタペストにも忍び寄ってくる。

ある日、店に一人のナチスの将校が現れる。ドイツに帰っていたハンスだった。ドイツの侵攻に伴いユダヤ人迫害が始まったのだ。ユダヤ人のラズロも身の危険を感じ始めていたが、ハンスはラズロの身を守ることを約束する。しかし、かつてのハンスとは異なって、ナチス将校の軍服に身を固めたハンスは、自分が手にしている権力を自分の力と過信している態度を時折みせるようになる。他のナチス将校を連れて再三店を訪れるハンスに人一倍不快感を募らせるアンドラーシュに、ラズロはよいナチスだっているとハンスを庇う。店の中でもナチス将校の居丈高さが目立ってきたある日、閉店して帰ろうとするラズロが、酔っ払ってハンスの肩にもたれかかっているナチス将校を故意に路上に転げさせ、そのことに立腹したナチス将校はラズロを何度も蹴り上げ、怪我を負わせる。ハンスがナチス将校をなだめてラズロを助けるが、イロナと共に引き返してきたアンドラーシュはラズロを自宅に運び、ハンスはイロナを送っていく。

ラズロへのナチス将校の暴行を途中で止めたハンスに礼をいうイロナに、ハンスは自分には結婚して子供がいると語り、写真まで見せながら、強引に言い寄る。だが、イロナはきっぱりと撥ね付ける。口惜しそうに引き下がるハンスは階段を降りる途中に出会

ったアンドラーシュに、部屋の中でイロナと何かがあったかのように軍服を整える仕草を見せつける。イロナの部屋に大急ぎで駆け込むアンドラーシュに、イロナはハンスへの感謝を口にする。アンドラーシュはイロナとハンスの仲を疑い始め、イロナが店を存続させるためにユダヤ人のラズロから自分に名義を書き換える用事でハンスの許を訪れたとき、外で待っていたアンドラーシュはイロナに一時間近くも何をしていたのか、自分たちだけでは足りずにナチまで相手にするのかと口走って、イロナを激昂させる。

ナチス将校の店への出入りが大っぴらになるにつれて、ハンスの態度も増長し始め、あるとき、アンドラーシュに「暗い日曜日」を弾けと要求する。無言で無視するアンドラーシュに一步も引かない表情のハンスが、弾けと命令口調で要求する。アンドラーシュは無視しつづける。店内は水を打った様に静まり、緊張感が走る。見かねたラズロも弾くように懇願するが、アンドラーシュは弾かない。イロナが傍に近寄ってアンドラーシュが書き始めていた作詞の譜面を取りだし、歌い始める。驚くアンドラーシュに小声で、私のために弾いてと囁きかけ、歌い出すとアンドラーシュも弾き始める。悲劇はその後訪れる。その場を切り抜けてイロナもラズロも、店中の者が安堵した瞬間、アンドラーシュはハンスの銃を奪って自殺する。ハンスとの仲を疑っていたアンドラーシュは、イロナの懇願をハンスのためと誤解して、絶望して自殺したのだ。

アンドラーシュを失って傷心のイロナをラズロは慰め、二人は肩を寄せ合って生きようとする。しかし、ユダヤ人迫害がラズロの足許にも及び始め、ハンスは収容所送りを免れるリストのトップに載せるから心配いらないとラズロにいい、お金が貴金属類を見返りに収容所送りを免れるようにするから知り合いのユダヤ人を連れてくるように、と親切心を装う。取引したハンスにユダヤ人たちは命の恩人と感謝するが、戦後の会社設立を見越してハンスはせっせと蓄財に励んでいたのだ。ハンスに金品を手渡すことなく収容所送りの名簿から除外されていた筈のラズロがある日、ナチスのトラックに乗せられて連行される。そのことを知ったイロナはすぐさまハンスの所に駆けつけ、釈放を懇願する。ハンスは手違いだから掛け合ってみるといって、イロナを思い通りにする。ハンスは直ちに行動し、収容所送りの列車の前に整列しているユダヤ人の群れの中にいるラズロと目を合わせ、名簿を手係官に耳打ちする。係官はユダヤ人の群れの中から一人の老学者を連れだし、それを確認したハンスはラズロのほうに一瞥して去っていく。

ラズロは列車に乗せられ、遂にイロナと自分の店の許に還ってくることはなかった。ハンスは自分の戦後の事業に役立つユダヤ人のみを救ったのである。ラストは次のシーンで締め括られる。戦後も数十年経って、ハンスの盛大な葬儀が行われており、ドイツの経済界で大成功を収めたハンスは、ナチ時代に多くのユダヤ人を救った恩人、義人としても称賛されている光景が映しだされる。他方で、ラズロ、イロナ、アンドラーシュが共に働き、人生の黄金時代を過ごしたブタペストの店が映しだされ、年を重ねたイロナらしい老女がハミングしつつ食器を洗っている後ろ姿に、中年の男性が「母さん！」と声をかける。親子でこの店を支えているのが窺われ、ラズロにもアンドラーシュにも似ていないその息子と母親を映しだして映画は閉じる。

監督はドイツ生まれのロルフ・シューベル、イロナはハンガリー女優のエリカ・マロ

ジャーンで、彼女の豊満な体躯と、一目見た誰をも魅了するにちがいない深淵な瞳と華やかな美貌が、ひたひたと押し寄せる時代の暗さの中にくっきりと浮かび上がってくるからこそ、彼女を取り巻く男たちの懊悩の彩りがスクリーンの隅々にまで滲みだしているのが感じ取れるのだ。アンドラーシュ役は映画『カストラート』主演のローマ生まれのステファノ・デイオジニ、ラズロ役は映画『ラン・ローラ・ラン』のドイツ生まれのヨアヒム・クロール。映画は本国ドイツで大ヒットを記録し、ババリアン映画祭で最優秀監督賞・最優秀撮影賞に輝き、韓国、ニュージーランドで半年以上に渡る異例のロングランを記録した。

「暗い日曜日」の作曲者レジョー・セレッシュがピアノを弾いていたレストラン`キシユ・ピパ(小さなパイプ)`は、「暗い日曜日」のヒットのお陰でブタペストの名所になり、ルビンスティン、メニューイン、トスカニーニの音楽家の他、英国皇太子、国連事務総長ウ・タント、フルシチョフ、イランのパーレヴィ国王、ヴィスコンティ、スペンサー・トレイシー、スタインベック、ルイ・アームストロング、レイ・チャールズなどが訪れている。作詞のラズロ・ヤーヴォルはそのレストランのオーナーだったようでキシユ・ピパではセレッシュの死後も、「暗い日曜日」が演奏され続けている。この曲は最初は1936年に、フランス語の詞を付けたヴァージョンをシャンソン歌手ダミアが歌って大ヒットし、ピリー・ホリディ、ルイ・アームストロングのほか、ビョークなど多くが、日本では岸洋子、越路吹雪、美輪明宏、金子由香利らが歌っている。

この映画の魅力はなんといっても、危うく悩ましい三角関係にあることはいうまでもない。恋に浸っているイロナとアンドラーシュが朝市を歩いている途中にラズロと出会い、何気なさを装うラズロを加えて三人が朝市の賑わいを楽しもうとするシーンや、観葉植物の茂るバスルームの中で丸裸のイロナとラズロが抱き合っ、シャンパンを乾杯し食事する、イロナがアンドラーシュと恋に陥る前のシーンなどが印象的であるが、全くだらなさは感じられない。イロナとラズロの関係は現実生活上のよきパートナーのようなものであり、したがって彼らの間にあるのは恋愛感情であるよりも信頼感である。他方イロナとアンドラーシュの間には恋愛感情しかなく、イロナとラズロの関係の上にイロナとアンドラーシュの関係が成り立ち、存続しているのがわかる。

ラズロは自分とイロナの関係がどんな関係であるか、をよく心得ていた。二人の間に生活が大きく割り込んでいる以上、もはや恋愛は成り立たなかった。恋に目覚めた彼女との関係を断つことは、自分にとってもイロナにとってもお互いを失うことでしかなく、これまでのお互いの生活に大きな支障を来すことは明らかであった。すべてを失うより、ちょっとだけ失うほうがましだとラズロがいったとき、彼は自分がイロナにとっての恋人であることの願望がすっかりなくなることよりも、イロナとの関係がなくなってしまうことのほうがはるかに大きいと思っていたのだ。恋愛感情でしかイロナを受け容れられないアンドラーシュには、そのようなイロナとラズロの関係は理解できなかった筈だ。アンドラーシュもまた、イロナを失いたくないために、彼らの関係を理解できないまま、自分も彼らも追い詰めることなく、三人の関係を維持していく以外になかった。

イロナの気持がアンドラーシュに傾くことで自分に対するイロナの気持が少し減じる

とラズロは考えたが、しかしながら、映画はイロナに対するラズロのこれまでの関係が、イロナに恋するアンドラーシュに対するラズロの新しい関係にまで広がる様相を映しだしている。アンドラーシュが作曲した「暗い日曜日」を売り出すのに力を尽くそうとするラズロの姿には、もはやイロナを軸とする三角関係をを超えて、アンドラーシュの才能の開花に少しでも尽くそうとする男同士の友情が刻み込まれていた。この映画について考えれば考えるほど、イロナが別の男になびいても以前と同様に彼女との関係を続け、そしてイロナの恋人が世に出ることに尽力しようとするラズロという人物こそが、この映画を非常に味わい深いものにしていることに気づく。ラズロと比較すると、アンドラーシュもハンスも、ただ無邪気に時代の中で与えられている自分の位置をそのまま歩いているだけにすぎないような気がする。イロナのあでやかな美しさですら、ラズロのなにもかもかかえこもうとする資質の茫漠さには及ばないと思われる。

ラズロの相手への対しかたを見ていると、自分との関係で相手を引き寄せたり、突き返したりするようなところはあまりみられず、むしろ相手が最も幸せな状態であることを受け入れて、その状態が持続しうることに尽くそうとしている。それはイロナやアンドラーシュに限らず、自分が命を助けたハンスがナチスの将校として現れた際にもみられた。ハンスのナチの制服に強い嫌悪感を露わにしたのはユダヤ人ではないアンドラーシュであり、逆にユダヤ人でありながらハンスをナチの制服だけでは判断しない態度を貫いたのは、ラズロであった。自分がユダヤ人である前に、一個の人間ラズロであるようにハンスをナチスではない友人ハンスとして遇したのである。だが自分以外のどんな制服も見につけていない三人の間では、ラズロのその考えかたは関係を心地よく持続させるのに最も適していたが、ナチの制服的な思考と振舞いを身に着けているハンスには通用しなかった。

イロナとハンスの間柄を邪推したアンドラーシュは自殺し、ラズロはハンスに救われることなく収容所に送られる。収容所送りの列車に乗せられる前にハンスと顔を見合わせたラズロは、ハンスが自分を助けに来てくれたと喜ぶ表情など一片も浮かべずに、不思議そうな面持ちでハンスを見、そしてあるがままの運命に身を委ねるような態度で列車に乗せられる。なにもかも見てしまったような、このなんともいえないラズロの表情と切り離して、この映画を思い浮かべることができないほど、スクリーンから彼は我々を見つめつづけていたのである。

いまたナチスが登場する映画が相次いでいるが、それは単にかつてのナチス時代を忘れないでおこうとする意志以上の、現在もまだナチスの`ホロコースト`が引き続いていることの証ではないか、と私には思われてくる。イスラエルがパレスチナ住民を虐殺し、パレスチナ人が自爆テロをもって報復する光景の繰り返しは、ナチスの`ホロコースト`時代の延長にほかならず、映画に登場するナチスのユダヤ人迫害はユダヤ人のパレスチナ迫害として繰り返されているとみななければ、映画はけっして現在に甦ってこないだろう。

2002年6月13日記